

タブレットが探究型学習を作っていく

当社は岐阜県の全小中高校に 100 年以上教科書を供給し続けてきてこの度、「スクールイーライブラリー」進呈させて頂きました。電子図書によって新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。スクールイーライブラリーの詳細情報は当社 HP (<http://www.gifukenkyohan.co.jp>) のバナーでご確認もできます。読書感想文コンクール等今後も岐阜県の読書推進をはじめとする教育サポーターをめざして参ります。岐阜県教販通信のバックナンバーも HP に記載しておりますのでご覧いただくと幸いです。

タブレットが探究型学習を作っていく事例の 2 回目。

前回少し触れた、松尾芭蕉の俳句と文章を学ぶ国語の単元は、「奥の細道」を題材に、グループ毎に短いプレゼンテーションにして発表するというものだった。このプレゼンテーションを、生徒たちに親しみが湧くよう「CM づくり」としているのがポイントである。これなら、生徒たちも日頃テレビで見ている CM のようなつもりでプレゼンテーションすればいい、とイメージが捉えやすい。

もちろん、CM づくりが＜目的＞ではなく、それはあくまで＜手段＞だ。＜目標＞である単元のねらいは、こうである。

【①文章の一節を効果的に引用して聞き手の心をつかむ表現力を身に着けているか

②グループで取り組むことで、意見を交換し、協働的に学ぶ力を身に着けているか】

授業の展開は、次の通りだ。

グループで話し合い、CM にする「奥の細道」に描かれている場所を選ぶ。次に、その場所のすばらしさを CM で表現する方法を考える。芭蕉が創作した俳句の内容を踏まえて劇化したり、スライドや音響等を使って解説したりなど、表現方法には自由度を持たせる。わたしが参観させてもらった授業は、前時までに各グループで CM を作成し、発表する段階だった。どのグループのものも、ひとりひとりの生徒が「奥の細道」の内容をよく理解していると思える発表と感じた。発表後には、クラス内の生徒にランダムに感想や意見を聞いていき、そこから CM の内容や意味を補完するなど、生徒の理解を深めるような対話的な学習になっていく。

「奥の細道」が載っているのは教科書だ。生徒たちの机の上には、常に教科書が広げられている。そこに記されている俳句や文章を、必要な時に見ることができるのが大切な原典となっている。その原典に当たりながら、生徒たちは話し合っただけで CM の中身を作りあげていく。このとき、付随するさまざまな情報が必要だ。

選んだ場所が「夏草や つわものどもが 夢の跡」の平泉だとすれば、その歴史を「つわものども」が戦った時代まで遡って知っておかなければならない。現在の平泉がどんなところなのか、画像で確かめてみるのも大切だ。どんな食べ物が名物なのだろう？ 特産品は何だろう？ 生徒たちの疑問は、どんどん広がるに違いない。

それを解決するのが、タブレットの中に詰まっている膨大な情報である。また、発表をどんな形でやるのが一番適切かを考える上でも、YouTube などインターネット上にある多種多様な表現方法はヒントになる。グループで話し合う時も、生徒各自にタブレットは欠かせない。そう、つまりタブレットは、教科書を原典にしながら発展的に探究の歩みを進めていくためのナビゲーター的役割を果たすのである。

タブレットには、電子教科書や電子教材を搭載して使用する役割もあれば、オンライン授業の際のように、遠隔の場所を繋いで授業空間を作る役割もある。しかし、日常的に授業で活用するとすれば、それは、教科書から発展して探究を深めるための道具としての役割が最も適切なのではないか。 次回は、別の授業をご紹介します。

【次回へ続く】



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952 年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でならし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身